
あたたかい場所

涼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あたたかい場所

【Nコード】

N0838Q

【作者名】

涼

【あらすじ】

人はみんな辛い過去を持っている。でもそれを乗り越えたとき、素敵な未来が待っている。そんな二人の温かい物語。

彼と出逢ったのは、私がまだ19歳の頃だった。

私は高校を卒業してから、特に何もせず、フリーター生活を送っていた。高校三年生のとき、自分なりに大学進学や就職なども考えては見たが、自分が行きたいとも思わない大学や会社に行っても、未来が見えない、なんてドラマのようなことをその頃は本気で思っていて、アルバイトをしながら、いつか自分の本当にやりたい事、天職のようなものが見つけれられることを願いながら、毎日を過ごしていた。

私のアルバイト先は、家から歩いて15分位の場所にあるカフェレストランで、小さいけれど、コーヒー豆の種類が沢山あり、食べ物もすごく凝っていて、昼時には小さな店内は近所の主婦や、会社員達でいっぱいだった。私がこのレストランに応募した理由は、ただコーヒーが死ぬほど好きだから。家から歩いて通える距離だから。それだけのことだったが、私はそこでの仕事を自分なりに精一杯やっていた。オーナーも、私の仕事ぶりにとっても感心していて、休憩のときはいつも、とびっきりの美味しいコーヒーを淹れてくれた。

このレストランのオーナーは、井咲直人といって、私が彼と出逢ったとき、彼はまだ27歳だった。若いオーナーだなあと、正直、不安な気持ちもあったが、話をしていたら、すごく落ち着いたやさしい雰囲気を持っている人で、いつの間にか不安な気持ちは消えてしまっていた。

私は高校三年生の夏休み、進路はまだ決めていなく、親にがみがみ言われながらのんきにテレビを見ていた。特に見たい番組があったわけではないが、本当に何もする気になれなくて、なんとなく画面をぼつと眺めていた。すると、真つ赤な夕日に照らされた山脈が映し出された。その映像はとても綺麗だった。山の麓の小さな町に、

民族衣装を纏った人たちが、民族民謡を演奏したり、踊ったり、何とも言えない温かい映像だった。私は旅番組、特に海外の旅ものは好きでよく見ていた。何か見ていると、夢見心地にさせてくれて、何も考えずに見入れたからだと思う。夢の国のような映像がいつも映し出され、太陽の光にきらきら光る湖や、大きなクジラが広い海原で、ものすごい水しぶきをあげてジャンプしている姿、果てしなく続く乾いた大地で、シマウマやライオンたちが、生と死の境で一生懸命に走っている姿、そして、やけどしそうなくらいに、真っ赤に焼けた山脈と共に生活している人々。私はそんな映像を、自分とはまったく縁の無い世界と見ていたが、学校を卒業し、親元を離れ、自分の力で生きていく時が着たら、温かく居心地のよい小さな家を出て、いつか夢の世界へ行ってみようと、秘かにそんな夢を描いていた。

そして無事に高校を卒業し、アルバイトをしながらお金をため、手始めに英会話教室に通い始めたのだが、なかなか思いど通りに事は進まないもので、貯金も夢の世界に飛び出すにはまだまだ足りず、大好きなコーヒーの香りに包まれながらの仕事は居心地がよすぎて、新しい世界に行く気持ちも、ふわふわした煙に巻かれてしまい、まだ少しの間はこの中にいてもいいかなと、いつもアルバイトの帰り道、そんな事を考えながら、街灯に照らされた商店街を歩いていた。

私は週に二回、英会話教室に通っていて、お店が定休日の月曜と水曜の休憩時間、合計すると週にたったの二時間の授業時間だが、私はいつも真剣に勉強していた。学生の頃はあんなに退屈に思えた勉強が楽しくてしょうがなかった。たまに授業の一環で公園や神社に行って、教科書だけの勉強ではなく、自然に会話が出来ると、そんな場も儲けてくれた。そんな時は、お店に戻るのが遅れてしまつて、急いで着替えて店内に入ると、オーナーは一人でキッチンの仕事や、空いた席の片付け、会計など凄く忙しそうにフロアを動き

回っていた。そして私が戻ってきた姿を見つけると、子供のような笑顔を見せて、

「しおちゃん、おかえり。」と私を迎えいれてくれた。そのたまらない笑顔を見るたび、私の胸は熱くなり、心臓が音を立てているのを感じた。自分でも気づかぬうちに、私は彼を好きになっていった。

彼と一緒に仕事をしている時間はいつも温かく、とても幸せで、わたしは夢の中に居るようだった。

たまに、おせっかい好きの近所のおばさんが来ると、

「なんか新婚さんみたいねえ、直人くん、しおちゃんお嫁さんにもらっちゃいなよ。」

なんて、周りのお客さんに聞こえるくらいの声で、よく私たちを冷やかした。

その度に、私が顔を真っ赤にして恥ずかしがっているのを、おばさんはいつも面白がって見ていた。

オーナーはいつも笑顔で、

「しおちゃん困らしちゃだめだよ。」と助けてくれた。

おばさんは、いつも楽しそうに、「はいはい。」と言いながら、小走りでお店を出て行くのが一つの恒例になっていた。

オーナーは私よりも8歳年上で、ここのレストランを始めるまでは、東京の有名なレストランでシェフとして働いていた。上の人からも腕があると認められ、これからという時、彼のお母さんが突然に病に倒れ、帰らぬ人となってしまった。

彼の両親は離婚していて、兄弟もいなかったもので、彼はたった一人の家族を亡くしてしまったのだ。

前に彼はそのことを話してくれたことがあった。お母さんが一生懸命に続けてきたレストランを失くしたくないと、東京のレストランを辞め、ここ北海道の実家に戻り、お母さんの大切だったレストランを一人でやり始めた。

そんなオーナーの過去を知り、私は彼がどれだけの辛さや苦しみを乗り越え、このレストランを続けるために一人で頑張ってきたのか。

彼の気持ちは彼自身にしかわからないけど、眩しいくらいの彼の笑顔を見るたびに、嬉しさと同時に彼の心の奥の暗闇が伝わってくるようだった。

私が彼のレストランで働き始めて、もう4年が過ぎた。

あい変わらず、わたしは海外へ羽ばたく夢は捨てておらず、温かいコーヒーの香りに包まれ、大好きなオーナーの居るレストランで同じ空気を吸い、オーナー、しおちゃん、と呼び合いながら、変わらぬ毎日を過ごしていた。

その日は朝からどんよりした空気で、空一面に灰色の雲が少しの間も残さず覆いつくしていた。

私は折り畳み傘をバックに入れ、家を出た。英会話教室は無かったので、休憩中の札をドアにかけて、オーナーと二人でランチを食べた。オーナーが作るご飯はいつも凄く美味しくて、タダでこんな料理が食べられるなんて私はラッキーだなあ、といつも思っていた。

その日のメニューは、赤ワインでコトコト煮込んだ牛肉にバターライスが添えてあり、可愛い丸いカップに入れられたシャキシャキのサラダ、食後にはカスタードタルトと淹れたてのコーヒーを出してくれた。私はこんな豪華な食事を賄いで出してよいのかと思いつつも、いつも全部残さず食べた。オーナーは溢れんばかりの笑みを私に見せ、

「しおちゃんの食べっぷりは最高だね、もつと美味しいものを作りたくなるよ。」

「じゃあ、もつと沢山食べなきゃ。」と二人で笑いあった。

9時には最後のお客さんは帰り、片づけをして私がお店を出ようとした時は10時を過ぎていた。

オーナーは「お疲れ様、また明日ね。」と言ってドアを開けると、何か驚いたような顔をして暗闇の中を見つめていた。私はその視線を追った。外は暗くてはつきりは見えなかったが、車のライトで照らされて、その先に女の人のシルエットが見えた。その女性は、私

たちに向かつて歩いてきて、一瞬私の方に目を向け、少し笑顔を見せてからオーナーの目を真っ直ぐ見て、柔らかな笑顔で、

「久しぶり。」と声をかけた。オーナーは少し恐い様な目をしていたが、「しおちゃん、気をつけて帰ってね。」といったもの半分くらいの笑顔で言った。私は何か不安な気持ちを引きずりながら、お店のドアを出た。その日の夜は、布団に入ってから、頭の中にはオーナーと女の人の事がいっぱい、とても眠れる状態ではなかった。あの女性はいつたい誰なんだろう。ただの友達と見たかったが、あの時のオーナーの目は、なんだか少し寂しそうで、でもどこなく懐かしそうにも見えた。

女性は、久しぶりと言っていた。やっぱり昔の彼女なのだろう。考えればオーナーは東京に一人暮らしをしていて歳は31、今まで彼女がいらないほうがおかしい。でもオーナーから恋愛話なんて聞いたことは無かったし、私も聞かなかった。聞きたくなかった。

人の過去の恋愛話なんて興味は無い。まして、自分の大好きな人が昔誰かを愛して過ごしていた頃の話なんて聞いてしまったら、妬きたくも無いのにやきもちを妬き、嫉妬し、自分の全部のエネルギーをそんな事に使うなんて、私は絶対嫌だから。

私は高校生時代、付き合っていた人が居た。彼は一つ年上で、少し不良っぽい人だった。私も若かったのかそんな人に惹かれ、その人が強引だったせいもあるが付き合うことになった。彼は自分の思っている通りに私が行動しないとすぐにイライラして、よく元カノの話を出した。こんな時あいつはこうしてくれとか、こういう時あいつだったたらこうするな、とか。本当に私は腹が立った。一度我慢の限界で、それならその人とやり直せば、と言って殴られた。私はびびくりして涙が止まらなかった。泣きながら、別れるーと叫ぶと、彼はまた私を殴りそして、倒れると今度は足で蹴飛ばしてきた。私は訳がわからずひたすら泣いていた。私が一言口にしてしまった事で、彼の中の何かがブチッと音を立てて切れてしまったのだ。で

も少したつと、彼は信じられないくらい優しくなり、私の体を抱き寄せ、ごめん、痛かったよな、ごめんな、と言って謝ってきた。私はそんな彼にいつも怯えていた。彼を怒らせないように気をつけていると、いつの間にか口数が少なくなり、そのたびに、何黙ってんだと言つて殴つてきた。私は何度も別れをきりだったが、彼は首を立てには振らなかつた。そしてずるずると3年の月日が過ぎた。とにかくその男の束縛は凄かつた。学校帰り友達と遊びに行くとき、少しでも時間がある時は、連絡をしないとすごい剣幕だつた。偶然同じ中学だつた同級生の男の子と駅で会つて話していたときも、運悪く彼が通りかかり、男の子を睨みつけ、その子は逃げるように去つてしまつた。

私はそんな毎日にうんざりし、このままでは大切な友達がみんな居なくなつてしまふと恐怖を感じ、彼と本気で別れを決心をした次の日、私はあつけなく彼に振られた。

私はしばらくぼーっとしていたが、なぜか涙が止まらなかつた。彼はごめんなあ、と私の体を抱き寄せた。私の涙のわけ、もちろん3年間一緒に過ごした彼への情みたいなものもあつたとは思うが、別れたくてたまらなかつた人とやつと離れられる。毎日の緊張から解き放たれて、これからは自分の好きなように行動できるんだ、という嬉しさと安堵感がほとんどだつた。それからの毎日は、友達と遊ぶことが今までの何倍も楽しく感じた。新しい彼氏はなかなか出来なかつた。好きな人も出来なかつた。男の人と付き合う事に、慎重になりすぎていたのかもしれない。

そんな時、アルバイト先のオーナーに出会つた。初めて彼に会つた面接の日、私は少し緊張しながらお店の客席に座つていた。少しすると、オーナーらしき男性がコーヒーを二つ運んできて、一つのコーヒーカップを私の前にそつと置いた。「コーヒーは好き？僕はすごく好きなんだ。」そういつてカップを口に運んだ。私もそつと一口飲んだ。このコーヒーはすごく優しい味がした。私はカップをテーブルに置き、

「すごく美味しいです。」とその男性を見ると、彼はとても温かい笑顔で「良かった。」と言い、私の履歴書をチラッと見て、「矢沢しをりさん、僕は井崎直人といいます。一応このレストランのオーナーです。といっても今は僕一人しか居ないんですけど、君がよければ明日からでも来て貰いたいんだけど、どうかな？」と優しい声で言った。私は宜しくお願ひします、と頭を下げ、それから少しの間話と、オーナーの大好きなコーヒーの話をして、その日の面接は終わった。

そんな風に、すんなり私の採用は決まり、そしてそれからほとんど毎日を彼と一緒に過ごしているうちに、いつの間にか私は彼に恋をしていた。

見知らぬ女性がオーナーを訪ねてきた次の日、私は胸の中のもやもやした気持ちを押し込めて、いつものようにお店に行った。オーナーはいつもと変わらない様子で準備をしていた。工作中、私の頭の中はオーナーと女性の事で一杯だった。そして、いつもならあつという間に過ぎる忙しいランチタイムが、その日はなかなか過ぎてくれなかった。最後のお客が帰り、やっと休憩時間になった。

私は昨日の事を聞きたくてたまらなかった。あの女性は誰なのか、何しに来たのか、またオーナーに会いに来るのか。でも、オーナーは新しく仕入れたコーヒー豆の事や、新メニューの話をいつもと同じように話していた。少しだけいつもより口数が多く感じたが、それは、私がいつもより話さなかったせいだろう。結局、オーナーは何も言わず、私も聞くことが出来ずに休憩時間は終わり、ディナーの準備を始めた。その日はそれほど忙しくなく、いつもより早くお店を閉めた。お皿を洗って床をピカピカにモップをかけ終わった時、「コーヒーでも淹れようか。」と言って、棚からコーヒーカップを取り出した。私の胸はギュツと？まれたように苦しくなった。きつと昨日の夜の話をするのだと直感した。私はエプロンをとって、小走りです着替えに行った。

戻った時、オーナーは窓際の席に座って外を眺めていた。私がテーブルへ近づいて行くと、オーナーは「どうぞ。」と言って、コーヒーを私のほうに差し出した。私は椅子に座り、コーヒーを飲んだ。なんとなく少し気分が落ち着いた。私が顔を上げると、オーナーは少し元気の無い顔をして、「やっぱり、しおちゃんにはちやんと言っておいたほうがいいと思って、昨日の事。時間は大丈夫？」と優しく尋ねた。私は一回頷いて彼を見た。

「彼女は、昨日会った女性は、僕が東京に居た頃に付き合っていた人でね、僕が働いていたレストランのオーナーの娘なんだ。」
そういうとコーヒーを一口飲んで、小さく息を吐いた。

「前に母さんが死んだときの事話したことあったよね。それで東京のレストランを辞めてこの店を継いだって。」
私はただ頷いた。

「母さんが亡くなる少し前に、オーナーに言われたんだ。娘と一緒にあって、このレストランを継いでくれないかって。その時僕は、少し考えさせてくださいって言った。まだ僕は若かったし、仕事に夢中で結婚なんて考えた事もなかった。彼女と結婚してレストランを継ぐなんて、僕には自信が無かった。」
そう言っ窓の外を見つめた。

「それで、彼女は何を…。」私は最後まで聞くことが出来なかった。彼はうん、と頷いて話を続けた。

「その話があつてから、少しして母さんが亡くなって、この店を継ごうって決めたんだ。結婚してオーナーになる話は断って…。僕にはそんな自身は無いって言ったんだ。そしたらオーナーが、これからお母さんの大切にしていたレストランを続けているうちに、自身がついてくるかもしれない。そして、その時まだ娘が一番大切に思っついてくれたら、この話を受けてくれるって。僕は、わかりましたって返事をした。彼女とは、その話を断ったときに、時間を置こうって事にしたんだ。」

そう言うと、彼はじっと私を見つめた。私は彼の真剣な目に吸い込

まれそうになり、目を下に逸らした。

彼もテーブルに視線を落とした。そして椅子を座りなおし、再び話し始めた。

「彼女は、あの時の返事を聞かせてほしいと言った。僕への気持ちはまだ変わってないと言って…でも僕は断った。」

彼は私の目を真っ直ぐに見て言った。

「今の僕は、もしかしたらそのレストランのオーナーとしてやっていけるかもしれない。でも、僕の彼女への気持ちは変わってしまったんだ。もしかしたら変わったんじゃないのかも知れない。あの時も、彼女との結婚には踏み切る事が出来なかったから。だから彼女に伝えた。今、一番大切に思っているのは君じゃないって。」

「…しおちゃん、僕が一番大切に思っているのは君だから…。」
「えっ」

私は沢山のことを頭の中でぐるぐる回っていて、何がなんだか直ぐに理解出来なかった。

彼はゆっくりと話し出した。

「しおちゃんがここで働き始めてから、もう直ぐ4年が経つけど、何かあつという間だった。本当に毎日が楽しくて、しおちゃんが英会話教室に行っている間は、凄くつまらなく感じる。お店に戻ってきた時は、何か安心するって言うか…自分でもわからないんだ。いつの間にか好きになってた。…多分、初めてしおちゃんと出逢ったあの面接の日、コーヒーを美味しいって言った時の笑顔を見たときから、気になってたんだと思う。」

私は胸がいつぱいで、自分の気持ちをどう伝えていいのかかわからず、黙ってしまった。

オーナーは、「ごめん、突然こんな事言って。困らせちゃうのはわかってただけけど、君への気持ちをこれ以上抑えておくことが出来なかった。」と言って視線を落した。私は、深く深呼吸をして彼を見ていった。「全く困ってなんかいません。私もずっとオーナーの事を想ってたから、すごくびびっくりしちゃって。」

私は真つ赤な顔をして彼に微笑んだ。彼も照れくさそうに笑った。
「いつか、長い休みをとって、二人でおちゃんの言ってた夢の世
界へ一緒に行こうか。」
といつものとびっきりの笑顔で言った。
私のもう一つの夢、今までと変わらないレストランで、沢山のお客
さんに見守られながら、少し温かくなった空気の中で、いつまでも
ずっと笑顔でいよう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0838q/>

あたたかい場所

2011年1月16日08時26分発行